

- ☒ 話すこと ☒ 書くこと ☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実 ☒ 授業での活用 ☒ 家庭学習での活用
☒ パフォーマンステストでの活用 ☒ 課外活動での活用

実践のポイント

AIによる継続的な英語による発話等の機会の確保と教師(人間)による個別最適なフィードバックによる言語活動の質・量の向上

実証概要

<校数>小2校、中1校 高4校 <学年・人数>小179名(6年)、中169名(1及び2年) 高1,282 名(1又は2年)
 <アプリ等>小: Terra Talk(ジョイズ(株))、中: LANGX Speaking((株)エキュメノポリス)、高: CaLabo® チエル製品
 <AI機能について>

小中: 音声認識・評価AIを活用したチャットボット形式のスピーキング学習機能
 生成AIを活用したフリートーク機能・発音・音読・会話練習においてAIによるフィードバック機能 等

高: シャドーイングやディクテーション活動での音声認識、英語による発音の自動採点
 英語による要約を自動採点及び要約の模範解答例の提示

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●AI自動採点を活用した「話すこと」「書くこと」における反復練習の増加

(小・中) 授業冒頭の「帯活動」にAIを導入。既習語彙や基礎表現を用いた発話練習や、当該時間で扱う表現の導入・定着を目的とした活動に取り入れた。他者の評価を過度に意識することなく、自分のペースで繰り返し発話練習を行い、AIからのフィードバックをもとに発音や表現を改善しながら学習を進めた。

(高) 生成AIによる自動採点(発音・要約)を活用。「話すこと」ではシャドーイング活動等において、「書くこと」では英文要約において、技能面等に係るAIによるフィードバックを通して主体的な反復練習・推敲を促し、生徒は個々の練習量を確保した。

●教師によるコミュニケーションの適切さに係る個別的・対話的指導の充実

AIが基礎練習の実施や自動採点を担うことで、教師は「人間ならではの」役割(「話すこと」の内容に応じた抑揚の付け方や「書くこと」における論理性等)に注力できた。AIによる反復練習の増加はもちろん、教師による状況に応じた適切なコミュニケーションの指導(全体への共有、質の高い対面指導)の機会を確保した。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

(小・中) 90%以上の児童がパフォーマンステストで合格基準をクリアできた。即興の問いに素早く応答する力が向上した。
 (高) CEFRA2およびB1レベルが増加した。発信力が顕著に向上した。
 いずれも、練習量増加が要因として考えられる。

②児童生徒の関心・意欲の変化

「英語が好き(小:78.9%)」や「AIでもっと勉強したい(高:63.0%)」が増加。
 AI活用により間違いを恐れずに英語を練習できる(高:43.0%)点が主な要因となり、心理的障壁の軽減が学習の意欲向上に繋がった。

③教師の指導の変化

全ての校種において、「英語による発話量の増加」と「評価頻度の向上」について、AIの寄与を教師が肯定。校種によって異なるが、AIが基礎的な反復練習相手、教師がAIを含めた授業設計者であり丁寧な個別指導者、といった役割分担が明確化。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」

本事業では、全校種のリーダー教員による実践及び本県における研究協議会を通して、AIの活用目的とその方法に関する知見を深めた。「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を軸に、AIを活用した効果的な学習プロセスや指導法を研究し、生徒の発信力向上と、教師が設計者・促進者として機能する「人間とAIのベストミックス」による授業改善をめざし、AI活用の知見を蓄積することの重要性が再確認できた。一方で、校内の教員間でAI活用に対する温度や知見に差があることや、自動採点(AI)では評価できないことを、教師(人間)がいかに指導・評価していくかが今後の課題である。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

【成果:心理的抵抗の軽減と練習量の確保による英語力向上】小・中・高を通じ、AIによる即時フィードバックが生徒の心理的負担を軽減させ、学習意欲と英語力(特に発信力)の向上に寄与したことが確認された。

【課題と今後の取り組み:実践事例の普及とさらなる指導改善】生徒の英語によるコミュニケーション能力育成を根底に置き、教師が「設計者・促進者・フィードバック提供者」としての役割を全うすることが求められる。AIでは評価困難な「コミュニケーションの適切さ」に係る要素の指導・評価を教師(人間)が担い、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させていく。